第34回 平日の午後のコンサート。

2024.7.4(木) 14:00開演　東京オペラシティ コンサートホール
Thu. July 4, 2024, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

第22回 渋谷の午後のコンサート。

2024.7.7(日) 14:00開演　Bunkamura オーチャードホール
Sun. July 7, 2024, 14:00 at Bunkamura Orchard Hall

〈夏のパリへ〉〈To Paris in Summer〉

指揮とピアノとお話　三ツ橋敬子　Keiko Mitsuhashi, conductor, piano & speaker

語り　大山大輔*　Daisuke Oyama, narrator & storyteller

コンサートマスター 依田真宣　Masanobu Yoda, concertmaster

今井光也：オリンピック東京大会ファンファーレ（約30秒）
Mitsuya Imai: Fanfare for the 1964 Olympic Games Tokyo (ca. 30 sec)

古関裕而：オリンピック・マーチ（約5分）
Yuji Koseki: Olympic March (ca. 5 min)

ブリテン：青少年のための管弦楽入門*（約17分）
Britten: The Young Person's Guide to the Orchestra (ca. 17 min)

プーランク(ジャン・フランセ編)：『子象のババールの物語』*（約27分）
Poulenc=Françaix: L'histoire de Babar, le petit éléphant (The story of Babar, the little elephant) (ca. 27 min)

— 休憩 intermission —

久石 譲：映画『菊次郎の夏』より「Summer」（約7分）
Joe Hisaishi: Summer from "Kikujiro"　(ca. 7 min)

久石 譲：映画『ハウルの動く城』より「人生のメリーゴーランド」（約4分）
Joe Hisaishi: Merry-Go-Round of Life from "Howl's Moving Castle" (ca. 4 min)

モーツァルト：交響曲第31番『パリ』（約20分）
Mozart: Symphony No. 31 "Paris" (ca. 20 min)
第1楽章 アレグロ・アッサイ／第2楽章 アンダンテ／第3楽章 アレグロ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））｜独立行政法人日本芸術文化振興会
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan ｜ Japan Arts Council
協力：Bunkamura (7/7) / In Association with Bunkamura (July 7)

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために　♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とピアノとお話　三ツ橋敬子
Keiko Mitsuhashi, conductor, piano & speaker

©Earl Ross

東京藝術大学及び同大学院を修了。ウィーン国立音楽大学とキジアーナ音楽院に留学。小澤征爾、小林研一郎、G.ジェルメッティ、E.アッツェル、H=M.シュナイト、湯浅勇治、松尾葉子、高階正光の各氏に師事。第10回アントニオ・ペドロッティ国際指揮者コンクールにて日本人として初めて優勝。併せて聴衆賞、ペドロッティ協会賞を受賞し、最年少優勝で初の3冠に輝いた。第9回アルトゥーロ・トスカニーニ国際指揮者コンクールで女性初の受賞者として準優勝。第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。2009年Newsweek Japan誌にて「世界が尊敬する日本人100人」に選出。2011年小澤征爾音楽塾中国公演では小澤征爾氏の代役で指揮、ピーター・ゼルキン氏と共演した。2013年第12回齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。一級小型船舶操縦士。

語り　大山大輔
Daisuke Oyama, narrator & storyteller

東京藝術大学首席卒業。同大学院修了。“井上道義×野田秀樹”による『フィガロの結婚』フィガ郎や、佐渡裕指揮『メリー・ウィドウ』のダニロ、手塚治虫原作・宮川彬良作曲 歌劇『ブラック・ジャック』タイトルロール、など独自性の強い作品での主役として圧倒的な存在感を示している。また役者として演劇作品への出演や、劇団四季ミュージカル『オペラ座の怪人』ではタイトルロールとして客演するなど幅広く活躍。洗足学園音楽大学ミュージカル・声楽コース講師、カクシンハン・スタジオ（演劇研修所）講師。

プログラム・ノート

解説＝飯尾洋一

夏とパリにまつわる名曲で楽しむコンサート

今年は4年に1度のオリンピック・イヤー。7月26日から8月11日にかけて、パリ・オリンピックが開催されます。1924年の第8回大会以来、ちょうど100年ぶりにパリでオリンピックが開催されるとあって、この夏は一段とパリへの注目が高まりそうです。

本日は夏とパリにまつわる名曲を中心としたプログラムが組まれました。まずは、1964年の東京オリンピックにタイムスリップ。続くブリテンの「青少年のための管弦楽入門」とプーランクの『子象のババールの物語』では、大山大輔による語りが入ります。ともに子どもに向けて書かれているようでいて、実は大人になってからも楽しめるのが、この両作品。久石譲の映画音楽2曲では、指揮の三ツ橋敬子がピアノを披露します。

モーツァルトはウィーンで活躍した作曲家ですが、パリを旅して大きな刺激を受けています。旅先のパリで生まれた交響曲第31番『パリ』が、華やかな都市の活気を伝えてくれることでしょう。

オリンピック・イヤーの夏休み気分を盛り上げる音楽を三ツ橋敬子の語りとともにお楽しみください。

東京オリンピックを華やかに彩った名曲から

オリンピックを華やかに彩るのがファンファーレ。1964年（昭和39年）の東京オリンピックでは、**今井光也**（1922-2014）作曲の**「オリンピック東京大会ファンファーレ（東京オリンピック・ファンファーレ）」**が開会式や表彰式で用いられました。

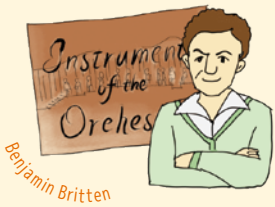
作曲者は当時、メーカーに勤務する会社員で、長野県のアマチュア・オーケストラ、諏訪交響楽団の指揮者を務めていました。現代の感覚からすると意外なことですが、大会のファンファーレは一般公募で募られました。集まった応募作品は400曲以上。「作品のほとんどは西洋調のメロディだったが、今井氏の作品には東京大会にふさわしい日本的ムードがある」と評されて、この曲の採用が決まりました。

1964年の東京オリンピックからは、ファンファーレのみならず、さまざまな音楽が生まれました。そのなかでもっともよく知られているのは、開会式の入場行進曲として使用された**古関裕而**（1909-1989）の**「オリンピック・マーチ」**でしょう。よく「オリンピック東京大会ファンファーレ」とセットで演奏されています。2021年の東京オリンピック閉会式にもふたたびこの曲が使われて話題を呼びました。

古関裕而は「栄冠は君に輝く」「六甲おろし（阪神タイガースの歌）」「高原列車は行く」「長崎の鐘」「紺碧の空」「モスラの歌」など、数々の名曲で知られる作曲家です。2020年のNHK連続テレビ小説『エール』では主人公のモデルとなりました。

曲の終結部には「君が代」の一部が巧みに織り込まれています。

音楽を楽しみながら学ぶオーケストラ入門



ベンジャミン・ブリテン（1913-1976）は、20世紀イギリスにおける最大の作曲家。オペラや管弦楽曲、室内楽曲などさまざまな分野に傑作を残しています。ブリテンは1946年にイギリス教育省の

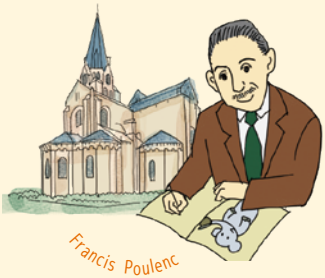
依頼により、音楽教育映画のために**「青少年のための管弦楽入門」**を作曲しました。オーケストラはどんな楽器で構成され、それぞれの楽器はどんな音がするのか。これをナレーション入りの音楽によって知ってもらおうというのが、この曲の役割です。学校の音楽の授業でこの曲を聴いたことのある方も多いのではないでしょうか。

冒頭、オーケストラ全体で奏でられるのは、古い時代のイギリスの作曲家パーセルが書いた荘重なテーマ。続いて、このテーマが木管楽器、金管楽器、弦楽器、打楽器に引き継がれ、もう一度、オーケストラ全体で演奏されます。その後、さまざまな楽器が順番に登場し、この主題を変奏します。

ひとしきり変奏が終わると、フーガが軽快に始まります。フーガとは複数のパート間でテーマを模倣する作曲技法のこと。やがて、これに荘重なパーセルの主題が重なり合って、雄大なフィナーレを築きます。

実用的なオーケストラガイドであると同時に、純粋に音楽として鑑賞可能な芸術作品になっているところに、ブリテンの非凡さがよくあらわれています。

絵本の世界へ誘う表情豊かな音楽



フランスの作曲家**フランシス・プーランク**(1899-1963)といとこの幼い子どもたちとの交流から生まれたのが、**『子象のババールの物語』**。「子象のババール」とは絵本作家のジャン・ド・ブリュノフによる絵本のタイトルです。

第二次世界大戦中の1940年、フランスがドイツに降伏すると、従軍中だったプーランクは兵役を解かれ、いとこたち一家の疎開先ブリーヴ=ラ=ガイヤルドに滞在します。いとこの幼い子どもたちのお気に入りの絵本は「子象のババール」。プーランクはこの絵本に曲を付けました。作曲はいったん中断されましたが、1945年にプーランクは語りとピアノのための作品として『子象のババールの物語』を書きあげます。初演は1946年、フランス国営放送のラジオ番組にて。その後、作曲者の推薦により、同じくフランスの作曲家ジャン・フランセがオーケストラ用の編曲を担当しました。

『ぞうのババール』
ジャン・ド・ブリュノフ 絵・作
矢川澄子 訳／出版社:評論社

題材となった絵本は日本でも出版されていますので、ご覧になったことのある方も多いことでしょう。森で暮らす子象のババールがお母さんといっしょに森を散歩していると、猟師があらわれ、お母さんを撃ち殺してしまいます。ババールは逃げ出して、人間たちの町にたどりつきます。そこで出会ったお金持ちのおばあさんが、ババールになんでも買い与えてくれました。でも、ババールはホームシックにかかってしまいます。やがて、いとこたちがババールを見つけ出し、ともに森へ帰ることに。森に帰ったババールは新しい王様に選ばれます……。

音楽はときに楽しく、ときにエレガント。表情豊かで精彩に富み、絵本の世界をほうふつとさせてくれます。本公演では矢川澄子の訳による日本語版でお届けします。

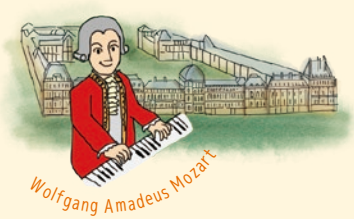
久石譲作品を三ツ橋敬子のピアノとともに

映画音楽や現代音楽の世界で精力的に活動を続ける**久石譲**(1950-)は、現在の日本を代表する作曲家のひとり。近年は指揮者としても国際的に活躍をくりひろげています。本日は久石譲作曲の映画音楽が2曲、三ツ橋敬子のピアノと指揮により演奏されます。

映画**『菊次郎の夏』**は1999年に公開された北野武監督の作品。遊び人の中年男性と、生き別れた母を探す少年によるある夏の日の旅が描かれます。**「Summer」**はそのメインテーマ。テレビCMでも使われ、広く親しまれています。

映画**『ハウルの動く城』**は2004年に公開された宮崎駿監督によるスタジオジブリ制作の長編アニメーション。呪いで90歳の老婆に変えられてしまった少女と魔法使いの青年の物語が描かれます。**「人生のメリーゴーランド」**はそのテーマ曲として作曲されました。

パリの聴衆を夢中にした名曲



ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)は生涯の多くを旅先で過ごしています。1778年、22歳のモーツァルトがパリを旅した際に書いたのが、**交響曲第31番『パリ』**。モーツァルトは当時パリで人気を博していた公開演奏会シリーズのために新作を依頼され、この曲を書きあげました。

しかし、リハーサルは本番前日の一回のみ。リハーサルの出来に不満だったモーツァルトは「こんなひどい演奏は今までに聴いたことがない」と嘆いていました。ところが、本番は予想外の大成功になりました。

「第1楽章アレグロのまんなかに、きっとウケるにちがいないとわかっていたパッセージがありました。そこで聴衆はみんな夢中になって、たいへんな拍手喝采でした。僕はその効果を心得ていたので、最後にもう一度、それを出しておきました」(父レオポルトへの手紙より)

その拍手喝采のパッセージがどこなのか、判然としないのですが、パリの聴衆はモーツァルトの狙いを正しく受け止めてくれたようです。

力強く活気にあふれた**第1楽章**、優雅な**第2楽章**、はしゃぎ回るような**第3楽章**から構成されます。

いいお・よういち(音楽ジャーナリスト)／著書に『クラシック音楽のトリセツ』(SB新書)、『R40のクラシック』(廣済堂新書)、『マンガで教養 はじめてのクラシック』監修(朝日新聞出版)、『クラシックBOOK』(三笠書房)他。雑誌やウェブ、コンサート・プログラム等に幅広く執筆する。テレビ朝日「題名のない音楽会」他、放送でも活動。